

デカルトにおける意志、誤謬と自由

―「第四省察」をめぐる―

久保田 進一

はじめに

デカルトの『省察』の「第四省察」は、その位置付けや議論の内容において、以前から問題とされている。たとえば、「第一省察」は内容からしても懐疑論が問題になっている。「第二省察」はコギトが確立される内容であり、そして「私」とは何であるのかの議論が行われている。「第三省察」と「第五省察」は、神の存在証明についての議論がなされている。「第三省察」は、二つの証明がなされているが、両者ともア・ポステリオリの証明である。要するに、結果からの証明と言われる。「第五省察」は、一つの証明であるが、存在論的証明と言われるものであり、ア・プリオリの証明とも言われ、原因からの証明とも言われる。「第六省察」は、物質の存在証明についてとそこから精神と身体（物体）の實在的区別というデカルトの主張する二元論に結論づけるのである。ただ、「第六省察」については、もう少し複雑であり、「心身合一」、「感覚の見直し」、「自然の教えと神の善性」、「懐疑の解除」といった問題が絡んでいる。「第六省察」はいくつかのテーマが入り込んでいると言える。

一方、「第四省察」は何が問題なのかといえば、テーマは「真と偽について」であるが、その解釈をめぐる、研究者によって様々に解釈されている。たとえば、「第四省察」を「弁神論」と読む研究者もいるし、「自由論」と読む研究者もいるし、「誤謬論」と読む研究者もいる。もちろん、様々な解釈によって、読まれるのは可能である。ただ、どこにポイントを置いて読むのが重要である。また、なぜ「第四省察」は「第三省察」と「第五省察」の間に入れられたのかも一つの疑問になっている。

そこで、本稿においては、改めて「第四省察」をいかに読むべきか、あるいは「第四省察」の位置付けが意味するところは何であるのかを検討していきたい。まず、「第四省察」の位置付けを各省察の副題とシノプシス（概要）から確認する。次に、「第

四省察」の解釈について触れておく。その際、「弁神論」と「自由論」についての問題点を挙げ、「誤謬論」として読むべきことを提示する。次に、「第四省察」を読むに当たり、存在論としての誤謬の原因を検討する。同様に、認識論としての誤謬の原因を検討する。誤謬の原因を検討したあとで、そこから派生する「自由論」すなわち二つの自由（非決定の自由・自発性の自由）について触れておく。最終的には、「第四省察」を「誤謬論」として読むことによって、『省察』全体の流れの中では違和感のある、この「第四省察」を適切に位置付けたいと思う。

1 「第四省察」の位置付け

デカルトの主要著作である『省察』の「第四省察」の位置付けは、以前から問題になっている。『省察』全体の流れは、懐疑から始まり Cogito の確立、神の存在証明、物体の存在証明といった一連の流れがある。この流れからデカルトの二元論という哲学体系が構築されていく。この構築の過程には、「第一省察」から「第六省察」までの六つの省察がある。

まず、各省察の副題を見てみよう。「第一省察」の副題が「疑いをさしはさみうるものについて」、「第二省察」が「人間精神の本性について 精神は身体よりもよりよく知られること」、「第三省察」が「神について、神は存在すること」、「第四省察」が「真と偽について」、「第五省察」が「物質的事物の本質について、そして再び神について、神が存在すること」、「第六省察」が「物質的事物の存在について、そして精神と身体との実在的区別について」である。このように副題を見てみると、デカルトの一連の思考の流れがわかる。ただ、問題になるのが「第四省察」の位置付けである。「第三省察」と「第五省察」は「神の存在証明」に関わっているのであるが、「第四省察」が両者の間に挿入されているのである。

シノプシス（概要）ではデカルトは「第四省察」をどうまとめているのであろうか。次に見てみよう。

「第四省察においては、われわれが明晰判明に認識するものはすべて真であることが証明される。それと同時に、虚偽の根拠が何において成立しているかが説明される。このことは、前のことがらを確かめるためにも、後のことがらを

理解するためにも、必ず知られていなければならない。(しかしその際注意すべきことは、そこで問題なのは、けっして罪、すなわち善悪の追求において犯される誤りではなく、真偽の決定の際に生じる誤りのみであり、またそこで考察されているのは、信仰あるいは実生活に属することではなく、思弁的で、自然の光のみによって知られる真理だけであるということである。)⁽¹⁾

以上のように、デカルトはシノプシスで「第四省察」についてまとめている。これを素直に読めば、「第四省察」は「明晰判明に認識するものはすべて真であること」、すなわち明晰判明知の規則を証明するために、「第三省察」と「第五省察」に挿入されていると言えよう。ただ、「第三省察」と「第五省察」のテーマが神の存在証明という流れから言えば、「第五省察」の次に「第四省察」を持ってきてもいいとも思えるが、デカルト自身は、虚偽の根拠についても「第四省察」で扱うということから、「第三省察」と「第五省察」の間に挿入することで、明晰判明知の規則を示そうとしたと思われる。

つまり、「第三省察」で神の存在がア・ポステリオリに証明され、「神が欺瞞者ではありえないことは十分明らかである」⁽²⁾とされるのである。ここで、次にやらなければならないのは、神が欺瞞者ではないことが明らかになった時点で、それでも、われわれは誤謬を犯すのである。では、その誤謬の原因、すなわち虚偽の根拠は何であろうかということである。このことについて検討することは、シノプシスにもあるように「前のことがらを確かめるためにも、後のことがらを理解するためにも、必ず知られていなければならない」ということで、「第四省察」は必然的に挿入されていると言えるだろう。「前のことがら」というのは「第三省察」までの議論のことであり、「後のことがら」というのは「第五省察」以降の議論である。これまでの議論を確認するためとこれからの議論を理解するために「第四省察」は、挿入されているのである。

2 「第四省察」の解釈をめぐる

これまで「第四省察」の解釈をめぐる、様々な解釈が挙げられている⁽³⁾。つまり、「第四省察」をどのように読むべきなのかということである。「弁神論」なのか、「自

由論」なのか、「誤謬論」なのか、そのポイントはどこにあるのかということである。様々な読み方はあるだろうが、『省察』を一つのテキストとして考える場合、デカルト自身が書いているシノプシスを無視することはできない。そうすると、「第四省察」は素直に「誤謬論」として読むべきであろう⁴⁾。もちろん、「誤謬論」以外の読み方として、「弁神論」や「自由論」の読み方が間違っているわけではない。確かに、「弁神論」や「自由論」の読み方を許す側面が、「第四省察」にはあるのも事実である。これらの読み方は、かなり関係しあっているので、ある読み方を主張したとしても排除しあうものではない。むしろ、それぞれが関係しあっているのである。しかし、主流は「誤謬論」で読むことが『省察』のテキストを最も素直に読める読み方であろう。むしろ、「弁神論」や「自由論」としての読み方は、「誤謬論」へと流れ込んでいく支流と考えるべきであろう。

そもそも「弁神論」とは、キリスト教における「悪の問題」からきている議論である。その議論とは、神は、この世界を創造した全能であり、完全で善なる存在者なのに、なぜこの世界に悪はあるのか、という問題に答えようとした議論である。世界の中の悪に対して創造主である神を弁護するということから「弁神論」と呼ばれるのである。つまり、全知全能であり、善なる神であるのなら、悪の存在しない世界も創りえたのに、現実の世界には、悪人はいるし、自然災害や戦争もあるのは、どうしてなのか。むしろ悪の原因は神にあるのではないのかという疑問も生じてくる。これは「ライプニッツのパラドックス」⁵⁾とも呼ばれている。この疑問に対して、神は悪の起源ではないと答えようとするのが「弁神論」である。そもそも「弁神論(theodicy/théodicée/Theodizee)」という語は、ライプニッツの造語であり、ギリシア語の「神(theos)」と「正義(dike)」を合わせて造った語である。そのため、「弁神論」は「神義論」とも呼ばれる。キリスト教においては、悪の問題はライプニッツ以前からあり、アウグスティヌスによる説明、つまり「悪とは善の欠如である」という考えが確立していたが、宗教改革以降、弁神論の議論が再び起こったのである。

さて、「第四省察」を「弁神論」として捉える読み方は、可能な読み方であろうか。確かに、「第四省察」の前半部は、私の誤謬を通して、誤謬の原因は神にはないということを議論し、神を弁護している議論である。ただ、「弁神論」はもともとキリスト教における「悪の問題」から由来している問題である。特に、「悪の問題」は、道徳や宗教に関する善悪や罪のことが問題になっているのである。キリスト教において

は、悪というのは罪という概念に大きく関わっている。しかし、デカルトは「第四省察」については、シノプシスで「しかしその際注意すべきことは、そこで問題なのは、けっして罪、すなわち善悪の追求において犯される誤りではなく、真偽の決定の際に生じる誤りのみであり、またそこで考察されているのは、信仰あるいは実生活に属することではなく、思弁的で、自然の光のみによって知られる真理だけであるということである」^⑥と述べているので、「弁神論」としてそれほど強調して読むことはできないことになる。つまり、誤謬の問題と罪の問題を混同してはいけないのである。ただ、「弁神論」として読むのであれば、「誤謬論」から派生する問題として、すなわち「欺瞞者ではない全知全能の神は私を創造したのに、なぜ私は誤ることを経験するのか」という形で答えを求めるのであれば、「弁神論」の一部として読むことはできるだろう。そういう意味では、「第四省察」の議論の主流は「誤謬論」であり、「弁神論」は「誤謬論」から派生する議論として、最終的には「誤謬論」へと流れ込んでいく支流の一つとして捉えるべきであろう。

それでは、「自由論」としての読み方はどうであろうか。「第四省察」の後半部は、自由意志の問題を扱い、非決定の自由という概念も登場してくる。しかし、これも「誤謬論」があつての「自由論」の議論である。誤謬の原因は何かということから意志の働きが関係しており、そこに自由という概念が関わってくるのである。そうなると、やはり「第四省察」は「誤謬論」がメインで、やはり、「弁神論」と同様に「自由論」は「誤謬論」から派生する議論として捉えるべきであろう。いずれにしても、「第四省察」は「誤謬論」として読むのが、最も素直に読めるのではないだろうか。もちろん、ロディス・レヴィスが指摘するように、『第四省察』は『第六省察』とともに、一六四一年の『省察』のためにつけ加えられたものなのである」^⑦と述べるように、『省察』全体の流れの中では、違和感はあるが、それでもデカルトが敢えて付け加えたということを重視するべきであろう。

3 存在論としての誤謬の原因

それでは、「第四省察」について、見てみよう。「第四省察」の副題は「真と偽について」であるが、いきなりこの議論には進まない。この議論をする上で準備が必要なのである。デカルトは、まずこれまでの議論すなわち「第一省察」から「第三省察」

までの議論を振り返る。そして、いくつかのことが確認される。それは、「人間精神について、それは考えるもの」であること、「神の観念が私のうちにある、すなわちその観念を持つ私が存在する」こと、そのことだけから「神もまた存在すること」、「そして私の全存在は各瞬間において神に依存していること」⁽⁸⁾である。これらのことが前提となって、議論は進められていく。「第四省察」の課題は、真と偽を区別し、誤らないためには何を避け、真理に達するためには何をなすべきなのかということ学ぶことである⁽⁹⁾。それでは、この課題をどのように答えて行くのか。デカルトの進む道は、「いまや私には、そこにおいて知識と知恵の宝がすべて秘められている真なる神の観想を通して、その他のものの認識にいたるある道」⁽¹⁰⁾なのである。

デカルトがまず認めることは、「神が私を欺くということはおよそありえない」⁽¹¹⁾ことである。その理由は、「すべての詐欺や欺瞞のうちには、何らかの不完全性が見出されるから」⁽¹²⁾である。そして、「欺くことができることは、何らかの明敏さやあるいは能力の証拠であるとも見えるかも知れないが、しかし欺こうと欲することは、疑いもなく悪意あるいは弱さを示すものであり、したがって神には適さない」⁽¹³⁾とする。ここで「神が私を欺かない」という根拠は、欺く能力があったとしても欺こうと欲することが神にふさわしくないからである。つまり、「欺くことができること(posse fallere)」と「欺くことを欲すること(velle fallere)」は、切り離されて、後者については神にはふさわしくなく、神に帰することはできないのである。

そして、この場面は「第一省察」の「数学の懐疑」の「欺く神の仮説」の場面に対応する。それは、「おそらく神は、このように私を欺くことを欲しなかったであろう。神は最善と言われているからである。だが、神がこのように私を常に誤るものとして創造したことが、神の善性に矛盾するなら、私がときどき誤ることを許しているのも、やはりその善性に適合しないと思われる」⁽¹⁴⁾と言う。ときどき誤ることを神が許しているのかどうかということは「第四省察」で議論されていることである。さらに、「神が私を欺くということはおよそありえない」というのは、デカルトが「第一省察」において欺き手の役割を「欺く神」から「悪しき霊」に変更した場面を思い出すだろう。それは、「真理の源泉である最善の神ではなく、ある悪しき霊で、しかも最高の力と狡知をもった霊が、あらゆる努力を傾注して私を欺こうとしている、と想定してみよう」⁽¹⁵⁾という場面である。「第一省察」の場面でもわかるように、神は欺く能力を持っていたとしても、欺こうと欲しないのである。したがって、「欺く神」という

ものは矛盾した表現でもある。そのため、「悪しき霊」に欺く主体が変えられたのである。「第四省察」においても、そのことは確認され、「神が私を欺くということはおよそありえない」のである。

次に、デカルトが認めることは「私のうちに何らかの判断の能力(judicandi facultas)があることを経験している」⁽¹⁶⁾ということである。この判断能力は神から与えられたものであり、神は私を欺こうとは欲することはないので、この能力を正しく使用するのであれば、私はけっして誤りえないのである。そして、「神は私が誤るどんな能力をも与えなかったのであれば、私はけっして誤りえないと思われるから」⁽¹⁷⁾である。つまり、私には私が誤るような理由は見いだせないのである。デカルトは続けて、「また実際、私がこのようにひたすら、ひとり神のことだけを考え、私をまったく神に向けている間は、いかなる誤謬や虚偽の原因も思い当たらない」⁽¹⁸⁾と言う。しかし、ここで「そのすぐ後で私の方に向き直ると、」私はそれにもかかわらず無数の誤謬にさらされていることを経験する」⁽¹⁹⁾と言う。先ほどまでは私には私が誤るような理由は見いだせなかったはずなのに、私自身に向き直ると私は無数の誤謬に陥っていることを経験するのである。

デカルトは、その理由について次のように言う。

「つまり私においては、神の観念、すなわち最高に完全な存在者の実在的で積極的な観念が見出されるだけではなく、いわば無の観念、すなわちすべての完全性からこの上なくかけ離れているものの、何らかの消極的な観念もまた見出されること、そして私はいわば神と無との中間者、つまり最高存在者と非存在との中間者として置かれているということに気づいた。」⁽²⁰⁾

ここで、デカルトは誤謬にさらされる原因は、自分の存在が置かれている位置にあるとする。つまり、私の存在は神と無との中間者、つまり最高存在者と非存在との中間者であるところに原因があると言うのである。「つまり、私自身は最高存在者ではなく、きわめて多くのものが私に欠けているかぎり、私が誤ってもなんら驚くには当たらないということにも気づいたのである」⁽²¹⁾とのことである。そして、「誤謬というものは、それが誤謬であるかぎりには神に依存する何か実在的なものではなく、むしろ単なる欠陥であること」⁽²²⁾、また「私が誤るのは、神から私が得た真を判断す

る能力が、私においては無限ではないことから生じること」⁽²³⁾を理解するのである。しかし、デカルトはここで満足するのではない。その理由は、「誤謬は純粋な否定ではなく欠如、すなわち私のうちに何らかの仕方であるべき認識が欠けていることだから」⁽²⁴⁾である。

ここから、さらに神について問う。「かの万物の最高の創始者によって作られたものが、すべての点で完璧でないということがありうるだろうか？」⁽²⁵⁾、「また神が、私をけっして誤らないように創造することができたことは疑いないし、また神は常に最善のことを欲することも疑いない。それでは、私が誤ることが誤らないことよりも、よりよいことなのだろうか？」⁽²⁶⁾と問うのである。これはある意味、「弁神論」の議論になっている。そこで、デカルトは次のように答える。「私にはその理由が理解できない何かが神によってなされたとしても驚くには及ばない」⁽²⁷⁾ということである。その理由は、「私の本性がきわめて弱く限られているが、他方、神の本性は広大で、把握しがたく、無限であることを知っているので、このことからまた、その原因を私が知りえない無数のことを神はなしうということも、私は十分に知っている」⁽²⁸⁾からである。ここに、神の無限性と私の有限性が対比され、よく「弁神論」の議論で言われるように、神の意図はわれわれには測り知ることとはできない、というものである。さらに、デカルトは「私が神の目的を探りうと考えるのは、無謀なことだと思うからである」⁽²⁹⁾と述べる。結局、われわれの存在は、神のように完全性・無限性を備えておらず、最高存在者と非存在ととの中間者という存在論的な位置が大きく関与しているのである。

4 認識論としての誤謬の原因

次に、認識論としての誤謬の原因について見てみよう。デカルトは、誤謬がどういうものであるのかを探究してみると、「それは同時にはたらく二つの原因によっていること、すなわち私のうちにある認識の能力と、選択の能力あるいは自由意志(arbitrii libertas)に、言いかえれば知性(intellectus)と同時に意志(voluntas)によっていることに私は気づくのである」⁽³⁰⁾としている。しかし、デカルトに言わせると、「知性のみによっては、それについて判断を下すことができる観念を私は認識するだけであるからであり、このように厳格に見られた知性のうちには、本来の意味でのいかな

る誤謬も発見されない」のである。つまり、知性は私のうちにある観念を、それをそのまま捉えて認識するだけなのである。

それでは、意志についてはどうなのであろうか。「意志はいかなる限界によっても限られていないことを私は実際に経験しているから」⁽³¹⁾である。そして、「ひとり意志つまり自由意志だけは、それ以上大きなものの観念が考えられないほど大きいものであることを、私において経験している。したがって、私が神のある像と似姿を担っていると理解しているのは、主として意志を根拠としてである」⁽³²⁾と言う。つまり、意志の作用は、神においても私においても変わらないのである。ということは、もし意志に誤謬の原因があるとすると、神の意志の作用においても誤謬があることになってしまう。そのことはありえないので、意志についても誤謬は発見されないのである。それでは、知性にも意志にも誤謬の原因がないとするならば、誤謬の原因はどこにあるのだろうか。

それは、「意志は知性よりもより広範囲に広がるので、私が意志を知性と同一範囲内に限らないで、私が理解していないものにまで押し及ぼすという、ただこの一つのことから」⁽³³⁾である。要するに、知性と意志のズレが誤謬を引き起こすということである。知性が認識した範囲で、意志も働いて一致すれば、誤謬は避けられるのであるが、知性が認識した以上に意志が広範囲に広がると、そこには不一致が起り、誤謬が生じるということである。それでは、誤謬を避けるにはどうしたらいいのかと言えば、「私が判断を下すにあたって、知性によって意志に明晰判明に示されているものだけに及ぶように、意志を制限しさえするなら、私が誤ることはまったくありえないのである」⁽³⁴⁾とする。

5 非決定の自由と自発性の自由

さて、「第四省察」においては意志の作用がどのようなかということ、誤謬が生じてきたが、これは自由意志を正しく使っていないということである。このことに関連して自由の問題について触れておこう。デカルトは、二つの自由を挙げている。一つは非決定(indifferentia)の自由であり、もう一つは自発性(spons)の自由である⁽³⁵⁾。

非決定の自由とは何であらうか。デカルトは次のように言う。「いかなる理由によ

っても私が他方よりも一方の側に動かされることの無いときに私が経験する」⁽³⁶⁾自由である。しかも「最も低い自由」⁽³⁷⁾であるとのことである。さらに言えば、「われわれが同じことをしたりしなかったりできる（つまり肯定または否定すること、追求または忌避することができる）」⁽³⁸⁾という自由である。AかBかの選択肢のどちらかを選ぶというものではなく、どちらも選べない、あるいは敢えてどちらも選ばないということである。どうして選べないあるいは決定しないのかと言えば、合理的な認識が欠如しているからである。「実際、またこの非決定は、知性がまったく何も認識しないものに及ぶだけではなく、一般に、意志がそれを熟慮しているまさにその時に、知性が十分明らかに認識していないものすべてに及ぶ」⁽³⁹⁾としている。そのような状態で決定すれば、誤謬に陥るのである。「非決定は自由における完全性を証するものではけっしてなく、ただ認識における欠陥、あるいはある否定を証するにすぎない」⁽⁴⁰⁾のである。そのため「最も低い自由」なのである。

一方、自発性の自由とは何であろうか。「何か外的な力によってそう判断することを強いられたわけではない」⁽⁴¹⁾自由である。デカルトはこの自発的な自由の例としてコギトの発見を挙げている。「たとえば、私がここ数日、この世に何かが存在するか否かを吟味し、それを吟味すること自身から、私が存在することが明証的に帰結することに気づいたとき、私はそれほど明晰に理解するものは真であると判断せざるをえなかった。これは、何か外的な力によってそう判断することを強いられたわけではない。むしろ知性における大きな光から、意志における大きな傾向性が生じたからである」⁽⁴²⁾とコギトの発見を例に挙げている。非決定の自由と自発性の自由を対比させてみると、「かくして、私がそのこと自身に対して非決定であることが少なれば少ないほど、私はそれだけいっそう自発的にかつ自由にそのことを信じたのである」⁽⁴³⁾としている。非決定の自由と自発性の自由は対極をなしていると言えるだろう。非決定の自由は「最も低い自由」であり、無知なる認識あるいは合理的な認識の欠如からのものである。一方、自発性の自由は明晰な理解に基づいたものである。このように「第四省察」においては、非決定の自由と自発性の自由が見られた。また、両者の違いは、明証的な認識があるかどうかである。当然、自発性の自由が真理に関わる場面では重要になってくる。

おわりに

以上のように、「第四省察」をどのように読むべきなのかということを検討してきた。『省察』全体の流れの中では、あとから付け加えられたということで「第四省察」は異質である。また、その読み方も「弁神論」なのか「自由論」なのか「誤謬論」なのかという議論がある。しかし、デカルトがシノプシスで言うように「誤謬論」として読むことが最も素直に読むことができるのではないと思われる。主流は「誤謬論」として読み、そこから派生する読み方として「弁神論」や「自由論」の議論も生きてくるのである。それによって、「誤謬論」から派生する自由の問題が自由についても非決定の自由と自発性の自由があり、対比することによって、その中身が明らかにされた。

さて、「非決定の自由」について、本来なら触れておかなければならないことがある。「第四省察」における「非決定の自由」の評価は「最も低い自由」という評価であった。それは、無知なる認識あるいは合理的な認識の欠如からのものであったためである。しかし、他のテキストや書簡においては、その評価は異なり、「非決定の自由」が『省察』とは異なる側面を見せていたりする。本稿においては、『省察』というテキスト、特に「第四省察」だけに絞ったため、他のテキストについては取り上げなかった⁽⁴⁴⁾。しかし、デカルト哲学の全体において、「非決定の自由」の概念の整合性はどのように考えたらいいかという問題もある⁽⁴⁵⁾。このことについては、今後の課題として残しておきたい。

註

- [1] デカルトからの引用は *Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, J.Vrin, 1996. からとし、これを AT.と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。『哲学原理』のみは、その部と節のみを記した。訳文については、『省察』、『哲学原理』はちくま学芸文庫による。

AT.VII.15. デカルト(2006) p.30.

(2) AT.VII.52. デカルト(2006) p.82.

(3) この点に関しては、村上 (1990, pp.229-241.) が、Gilson、Alquié、Gueroult、Gouhier、Rodis-Lewis、Beyssade、Marion の立場を紹介しており、またその解釈の問題点を挙げている。

(4) この点に関しては、山田 (1994, p.285.) が「だがたとえ付け加えてであっても、デカルトがそれを「第四省察」として本文に組み込んでよしとしている事実注目すべきであろう。筆者としては、シノプシスでのコメントを重視しておきたい」とあるように、私もシノプシスでの見解を重視する。

(5) 「ライプニッツのパラドックス(Leibniz' Paradox)」という語は、David Blumenfeld, "Is the best possible world possible ?" in *The Philosophical Review*, p.163, April 1975, Vol.84. No.2. に出てくる。詳細な議論は、Alvin Plantinga, "Which worlds could god have created ?" in *The journal of philosophy*, p.539, October 1973, Vol.LXX, No.17. にある。

(6) AT.VII.15. デカルト(2006) p.30.

(7) ジュヌヴィエヴ・ロディス・レヴィス (1990) pp.x-xi. この箇所は「日本語版のための序文」に書かれていることである。

(8) AT.VII.53. デカルト(2006) pp.84-85.

(9) この点について、「第四省察」の終わりでデカルトは「また私は今日、けっして誤らないためには何を避けるべきかを学んだだけでなく、同時にまた、真理に達するためには何をなすべきかを学んだのである」(AT.VII.62. デカルト(2006) p.97.) と述べている。また、村上は「言い換えれば、(学問的) 知識は実在する神によってではなく、神の実在を証明することによって、基礎を得るのである。この頂から世界についての諸学の確立へと向かう途を展望する。そこから一步を踏み出す。踏み出すことによって、諸学における真と偽の成り立ちを見極め、真と偽とを選んで別ける方途を見定めんとする。これが「第四省察」の課題である」(村上 (1990, p.245.))としている。同様に、小林も「人間が「無数の誤謬にさらされている」ということは経験上の事実である。これはどう説明できるのか。真理の基準を設定して具体的に学問の構築にあたる前にこの問題に答えておく必要がある。この課題に答えるのが第四省察である。そこ

で、この第四省察は「真と偽について」と題され、誤謬論ないし判断論を展開することになる。そしてその過程で人間の自由の問題に言及されることになる」(小林 (1995, p.224.))としている。

(10) AT.VII.53. デカルト(2006) p.85.

(11) *ibid.*

(12) *ibid.*

(13) *ibid.*

(14) AT.VII.21. デカルト(2006) p.39.

(15) AT.VII.22. デカルト(2006) p.41.

(16) AT.VII.53. デカルト(2006) p.85.

(17) AT.VII.54. デカルト(2006) p.86.

(18) *ibid.*

(19) *ibid.*

(20) *ibid.*

(21) *ibid.*

(22) *ibid.*

(23) AT.VII.54. デカルト(2006) p.87.

(24) AT.VII.55. デカルト(2006) p.87.

(25) *ibid.*

(26) *ibid.*

(27) *ibid.*

(28) AT.VII.55. デカルト(2006) p.88.

(29) *ibid.*

(30) AT.VII.56. デカルト(2006) p.89.

(31) *ibid.*

(32) AT.VII.57. デカルト(2006) p.90.

(33) AT.VII.58. デカルト(2006) p.92.

(34) AT.VII.62. デカルト(2006) p.97.

(35) 「自由」を二種類に区別しているのは山田 (1994, pp.272-277.) であり、本稿においてもこのことに則っていく。また、村上 (1990, pp.252-260.) は「自由」

を<自由 F>、<自由 S>、<自由 I>と三つに分けている。ただ、村上は「以上における<自由 F>、<自由 S>、<自由 I>について三つの自由があるというのではなく、意志が三つのすがたで働くと言うべきである」(p.257.)としている。

(36) AT.VII.58. デカルト(2006) p.91.

(37) *ibid.*

(38) AT.VII.57. デカルト(2006) pp.90-91.

(39) AT.VII.59. デカルト(2006) p.93.

(40) AT.VII.58. デカルト(2006) p.91.

(41) AT.VII.58-59. デカルト(2006) p.92.

(42) *ibid.*

(43) AT.VII.59. デカルト(2006) p.92.

(44) 「非決定の自由」が『省察』以外で言及されているのが、『哲学原理』(2009) (*Principia Philosophiae*, I-39, 40, 41)、1645年2月9日付のメラン宛書簡(AT. IV. 173)である。こちらに言及されている「非決定の自由」は「第四省察」とは異なる意味になっている。

(45) この「非決定の自由」をはじめ、意志の自由という問題に取り組んだ研究としては、大西克智(2014)『意志と自由——一つの系譜学——』知泉書館を挙げておく。この書はアウグスティヌス、モリナ、スアレス、デカルトといった4人を通して、「古代末期から近世の初頭にかけて起こった意志の自由をめぐる思考のあり方の変化を明らかにし、それを踏まえて従来のデカルト解釈を全面的に書き換える」(大西(2014) p.5.)といった野心的な書である。

参考文献

- ・ Alquié, F. (1950) *La découverte métaphysique de l'homme chez Descartes*, P.U.F.
- ・ Beyssade, J.-M. (1979) *La philosophie première de Descartes*, Flammarion.

- ・ Blumenfeld, D. (1975) “Is the best possible world possible ?” in *The Philosophical Review*, p.163, April 1975, Vol.84. No.2.
- ・ Descartes, R. (1904 (1996)) *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch.Adam et P.Tannery. Tome IV, VII, VIII. Vrin. ルネ・デカルト (2006) (山田弘明訳)『省察』 ちくま学芸文庫, ルネ・デカルト (2009) (山田弘明・吉田健太郎・久保田進一・岩佐宣明訳)『哲学原理』 ちくま学芸文庫.
- ・ 福居純 (2005)『デカルトの「観念」論—『省察』—読解入門』 知泉書館.
- ・ 福居純 (2014)『デカルトの誤謬論と自由』 知泉書館.
- ・ Gilson, E. (1913) *La liberté chez Descartes et la théologie*, Vrin.
- ・ Gouhier, H. (1962) *La pensée métaphysique de Descartes*, Vrin.
- ・ Gueroult, M. (1953) *Descartes selon l'ordre des raisons*, Aubier. 2vols.
- ・ 小林道夫 (1995)『デカルト哲学の体系』 勁草書房.
- ・ Marion, J.-L. (1981) *Sur la théologie blanche de Descartes*, P.U.F.
- ・ 村上勝三 (1990)『デカルト形而上学の成立』 勁草書房.
- ・ 大西克智 (2014)『意志と自由—一つの系譜学—』 知泉書館.
- ・ Plantinga, A. (1973) “Which worlds could god have created ?” in *The journal of philosophy*, p.539, October 1973, Vol.LXX, No.17.
- ・ Rodis-Lewis, G. (1971) *L'Œuvres de Descartes*, Vrin. 2vols. ジュヌヴィエーヴ・ロディス＝レヴィス (1990) (小林道夫・川添信介訳)『デカルトの著作と体系』 紀伊國屋書店.
- ・ 山田弘明 (1994)『デカルト『省察』の研究』 創文社.
- ・ 山田弘明 (2009)『デカルト哲学の根本問題』 知泉書館.